

〈翻訳と解題〉  
 エンニヤ・ウィルキンズ  
 「ムージルの〈少佐夫人恋愛事件〉——未発表の  
 テキストとともに」(2)

白 坂 彩 乃 ・ 大 川 勇

ムージルが若い頃に母-息子の近親相姦というテーマに没頭したことは、名状しがたい障害物とはなにか、そしてアガーテが身震いしたのはなぜかを示唆している。部隊長——よりはっきりといえば「少佐」——も彼の妻も親の像である。逃亡したアンダースのために部隊長の妻が「こっそり」口添えしたということは、[ムージルと母親の関係を思えば] 現実にはきわめて受け入れがたい（加えて、少佐夫人が毎日家庭でなにをしているかをウルリッヒが熟知しているということは、ひょっとすると誇張なのかもしれない）。ムージルは工学を専攻していた。父親も工学の教授だったが、情熱に欠けた騎手〔\*26〕だった。母親はピアニストとして賞賛的だった。断片的な草稿「ロマンの結末」（1905年〔クラゲンフルト版では1906-1907年〕）では、湖のほとりの行楽地で夏を過ごすあいだ、フーゴと母親は近親相姦的な戯れをする。そしてフーゴは母親に、マルガリータ（Margarita）やアントワネットとの情事を告白する<sup>32)</sup>。この少女のうち一人はマルグリット（Marguerite）の名で、すでに「ヒポリュテの日記」（早くとも1903年末〔クラゲンフルト版では1903-1904年〕）に登場する。そのフィクションをよそおった日記の書き手の名前は、以下の伝説、つまりヒポリュテスは母との近親相姦をкаろうじて逃れたが、馬に殺された（海岸で、雄牛に襲われて!）という伝説を踏まえて付けられたものなのである<sup>33)</sup>。この「日記」のなかで、ムージルは郷愁とともにヴァレーリエなる女性への愛を思い出している。「この重く熟れた果実が落ちるのを、僕は思い浮かべた」。9 A-AgのもとになっているS手稿〔s<sub>3</sub>+n-1のこと〕から、部隊長の妻の名がヴァレーリエだったことがわかる。「熟れた」ヴァレーリエと母-息子の近親相姦を結びあわせるものは、湖のほとりの行楽地、9 A-Agでいうところの「湯治場」である〔\*27〕。

1901年の「初秋か晩夏」（9 A-Agが述べるように）、ムージルがウルリッヒと同じく20歳だったとき、のちにしばしば言及することになる「ヴァレーリエ体験」が彼を襲った〔\*28〕。「ヴァレーリエ体験（Valerie-Erlebnis）」とは「若き日の体験（Jugenderlebnis）」、「生涯僕の心に残った一種の回心」と同じものである。小説のためのメモではこの体験とその喪失はアンダースのものになり、彼はそれをなんとか思い出そうとせずにはいられない。その体験における精神的なものと性愛的なものとの混同という要素は、青年期におけるこの両極的な愛の目覚めへとさかのぼる。1902年2月20日の日記では、「愛に生きた大いなる者たち（die großen Liebenden）」とし

て以下の人間を挙げている。「——キリスト、ブツダ、ゲーテ——ヴァレーリエを愛したあの秋の日々の僕」<sup>34)</sup>。1902年3月12日には、「過去の神秘体験が消えてゆく」のを感じたときに「ヴァレーリエとの突然の破局 (Bruch)」を思い出している<sup>35)</sup>。小説の素材にするためにこれらの古い日記に注釈をつけていた1920年代初めに、彼はアンダースについてのメモを残している。「ヴァレーリエ体験は、それが消えつつあると感じたときにアンダースによって中断された (abgebrochen)」<sup>36)</sup>。『特性のない男』第1巻第32章の最後の文の「中断 (Abbruch)」とは、神秘主義的陶酔が消えたとき、その陶酔の原因として意識されていなかった人との交際もまた中断されたということではないかと推測する者もいるかもしれない。アンダースは恋が冷めるというよく知られた現象について、「ヴァレーリエ」をふたたび見たとき彼の心は「冷たく」なったという言葉で説明している。

若いムージルは、自分の（審美家のあり方とは対照的な）「倫理的に鋭敏な (moralisch sensitiv)」〔Heft 11/23; TB, 92〕あり方はヴァレーリエ体験にはじまったとしている。毎日すぐれた考えをひとつ生み出すこと、毎日自分の魂をみがきあげること、それが「ヴァレーリエ体験から受け継いだこと (Valerie-Tradition)」〔Heft 11/22; TB, 91〕である。1920年代に彼はこうメモしている。「なにかを贈ったり与えたりする善意、つまり、ヴァレーリエ体験から得た善意 (Valeriegüte) という問い」〔Mappe VII/8/135〕<sup>37)</sup>。これらすべてにおいて「ヴァレーリエ」は指針である。意味されているのは人物ではなく、ある精神状態がもつ「啓示 (Erleuchtung)」という価値である。1902年3月12日の日記にムージルは20年後注釈をほどこし、「別の生」は「エロティックな夢想と似かよっている (verwandt mit erotischem Traum)」〔Mappe VII/11/15〕と述べている。現実レヴェルの関係ではなく、〈遙かな愛〉というエロティックな夢想だけが〈別の状態〉にともなって起こるのである<sup>38)</sup>〔\*29〕。

しかし、たとえ近親相姦タブーがムージルにとって（たとえばL・フランクやF・ティースとはちがって）文学的に重要という以上のものだったとしても、それが「熟れた」ヴァレーリエとどのように関係しているか、あるいは〈少佐夫人の物語〉のなかでそれがいったいなぜ障害物となり、そしてウルリッヒの女性関係すべてを損なう、たじろがせるような、長くつづくトラウマを生み出したのかということについては明らかになっていない。その理由は、9 A-Ag やその他のテキストにおいて、「若き日の体験」が起こったのは夏か秋かについてのムージルの記述があまりない点に求められるかもしれない。

「ヴァレーリエを愛した」「あの秋の日々」(1901年)、ムージルはヴェルター湖畔の「湯治場」フェルデンに母親とともに滞在していた〔\*30〕（フェルデンは間違いなく草稿「ロマーンの結末」の舞台でもある）。1939年の日記の記述では、「フェルデンでのあの秋」に彼は「おそらく18歳から20歳のあいだだった」<sup>39)</sup>。彼はじじつ21歳の誕生日を目前にしていた。ヴァレーリエから靈感をうけて、彼は月光に照らされながら散歩し、散文詩を書いた。そのうちの一つである「心情の放浪者 (Vaganten des Gemüths)」を彼は死ぬまで残しておいた。そのなかでは月が「青白く、満ちて」〔Mappe IV/2/115〕輝き、若い男がひとり急行列車のなかで恋人のことを

夢みながら、野を行く旅役者たちの隊列を見送る（ヴァレリーエが女優であるということの証左である〔\*31〕）。若い男は中背よりも小さく（ムージル）、エンジニアのような外見で（ムージル）、「神秘主義者の眼」をもっている<sup>40</sup>。湖を見下ろす山での体験は9月に起こったのであろう。ムージルは10月1日に小隊に加わるために、9月末に（おそらく急行列車で）ブリュンに戻った。騎兵少尉であるどころか、彼は1年の志願兵勤務を歩兵部隊ではじめたばかりだった<sup>41</sup>。彼の馬との関係はつねに象徴的な水準にとどまっている。

1939年に日記の書き手は、「卑しい（gemein）ことになる可能性があるのに、所有したくなる恋人」を、孤独にたいする神経症的な嗜好を、そして心乱される母親の存在、年老いた肌と、肉の塊と化した体の醜さを思い出した。1920年頃には母親はまったくちがう容姿で想起されていた。当時の日記は、彼が「おそらくすでに18歳か19歳になっていた」「（フェルデンの）ヴェルター湖での夏の滞在」を回顧している。ムージルのいう日付と季節については信頼できないにしても、こう考えるのは意味のあることだろう——アンダースがああ決定的な時期にウルリッヒより1歳若かったのは、日記の書き手が「以下のことを体験した」とき少なくとも20歳より1歳は下だったという事実と無関係ではないかもしれない、と。「ヴァレリーエ体験」とは別のこの「体験」とは、母親が湖上の飛び板の上に一瞬裸の姿でいるのを、偶然を装ってちらりと見たことであった。彼女は「とても白く豊かな美しい体つき」で、年齢は実際の47歳から「40すぎ」に引き下げられている<sup>42</sup>。日記の書き手の記憶では、賛嘆はぞっとするような「衝撃（Entsetzen）」と混ざりあっている。フェルデンはムージル家のお気に入りの場所だったが、たとえこの「夏の滞在」と「あの秋」が同じときのものであったとしても、それは母なる少佐夫人と「熟れた」ヴァレリーエとの関連を強調するだけだろう。

とはいえ、象徴を駆使したムージルの作品構想のなかで近親相姦がいかに重要な役割を果たしていようと、彼が絶えずくり返しこれとは別の二つのイメージに気をとられているのを無視することはできない。一つは嫉妬と裏切り、もう一つは病気である。そのどれもが「少佐夫人」を造形することに一役買っているようだ。1905年の日記のメモにはこうある。「必要な行動（Motion）を起こすためには、[……] ときには卑しく（gemein）ならねばならないし、またときには女性を「だまさ（betrügen）」なければならない。ひょっとすると、ヴァレリーエにたいしてもそうなのかもしれない<sup>43</sup>。ヴァレリーエを裏切ることは、ある意味では、山岳地帯でのエクスタシーのなかでのみ実現した愛を裏切ることである。1901年に「卑しい（gemein）ことになる可能性」は女中ヘルマ〔\*33〕において現実となり、彼女はのちにトンカとして有名になった（アントワネットと比較されたい〔\*34〕）。『トンカ』の物語はありうる裏切りとおそろしい病気をあつかっているが、両者はともに、〈少佐夫人恋愛事件〉以来ウルリッヒの女性関係がすべて「ゆがんだ」ものになってしまったのはなぜかという問いに関係があるのかもしれない。『トンカ』では、主人公の父である軍隊の将校（少佐？）は梅毒で衰弱している。主人公自身は健康だ。それゆえ、トンカが妊娠と同時に梅毒にかかったとき、それは彼女が彼を「裏切った」からにちがいない。1906年〔クラゲンフルト版では1907-1908年〕にムージルは、「5年前の

あのとき」ヘルマはやはり不貞をはたらいていたのではないかと推測している<sup>44)</sup>。彼があえて付け加えなかったのは、1901年は彼自身が「ひどくおぞましい病気 (so gräßlich krank)」の初期だったということである<sup>45)</sup>〔\*35〕。売春婦殺しのモースブルグラーが感じた女性への恐怖が、小説用のメモのなかで、彼が梅毒にかかっているという事実によって説明されるのと同じように、一言「おぞましい (gräßlich)」とだけ言われる感染症もまた、少佐夫人との「魅力的な」情事をなし遂げるのを妨げるのが何であったか説明してくれるだろう (それ以外には説明がつかない)。

主人公の背負うこのトラウマと〈別の状態〉の喪失は、切っても切れない関係にある。両方とも、「思索 (Nachdenken)」草稿における少佐夫人への二度目の言及のさいにほめかされている<sup>46)</sup>。「世界の心臓へと沈みこんだ少尉から最近のウルリッヒまで [……] 記憶の断片は [……] すべてなんらかのかたちで愛とやさしさと、エデンの園のように争いのない魂の楽園 (gartenhaft-kampflosen Seelengefilde) への切望と結びついていた」。「[正しい生 (das rechte Leben)] のイメージ」があるのは「この領域において」なのだ。この「正しい生」が達成される前に——ウルリッヒがそうでなければならぬと何度も主張しているように——くぐり抜けるべき魂の試練がある。1929年1月にはじまる小説の改稿のあいだに、ムージル自身がそれを体験したといってもいいだろう。

9 A-Ag とともに「第2巻」というファイルにあったのが、1925-1926年〔クラーゲンフルト版では1924年-1925年初頭〕に「双子の妹」の筋の急転を描いたS手稿である。〈別の状態〉は「楽園」に求められ (まだ「千年王国」ではない)、「楽園」は「正しい生」としてではなく、どこかほかの場所にいる状態、ほとんど現実の場所として想定された<sup>47)</sup>。S<sub>4</sub>+1-16というこの手稿では「楽園への旅」<sup>48)</sup>に向かうアンダースとアガーテが描かれているが、それは不吉なことに (ハーガウアーの告発からの) 逃走である。少佐夫人からのウルリッヒの逃走のように、旅は海へと行きつく (ソレントとカプリのようだ)。神秘主義的な面でもエロティックな面でも、近親相姦のハネムーンが成功することはなく、罪を犯した二人は気を紛らわせるための本もっていない。無気力に打ち負かされて、彼らは失敗した場合には自殺するという約束を破り、アンダースは「きわめて卑俗なやり方で」不幸なアガーテに絶えず暴言を吐く。当時計画されていた小説の後半部は放蕩者の歩みになっていた。そこではアンダースは次から次へと愚行や犯罪を犯し、売春婦となったアガーテとともにスパイとなって終わる〔\*36〕。この草稿は『特性のない男』の読者にはばかっていると思われるにちがいないが、しかしこれはムージルが古い手稿をばらばらにしてそれを新しい絨毯へと織りなした1929年の時点でも抱いていた、第2巻のための唯一の計画だったのだ〔\*37〕。そうすると、S<sub>4</sub>+1-16はその後9 A-Agのように『特性のない男』第2巻第41章以降で用いられたということ (9 A-Agはその前の章でも使われていたが)〔\*38〕、そしてその前からS<sub>4</sub>+1-16は〈少佐夫人恋愛事件〉との密な関連のなかで考えられはじめていたということ——この二点は重要である。

S<sub>4</sub>+6はこうはじまる。「夏の海と秋の高山地帯は、魂の二つの重い試練である (die zwei

schweren Prüfungen der Seele)」[Mappe VII/9/158]。アンダースの場合、魂の二つの重い試練は同じ要素からなっている。神秘的に愛した女性と性のタブー。遠く離れた風景への逃走。大洋のエクスタシーという強烈な孤独の体験。エクスタシーと愛の死。無気力。禁じられた行為の遂行、ただしよろこび抜きで。女性にたいする怒り<sup>49)</sup>。最後の四つは『特性のない男』における少佐夫人への言及においてほめかされている。第32章には最初の三つだけがあり、それらはあきらかに〈少佐夫人の物語〉全体の本質をなしている。1929年にムージルがS<sub>4</sub>手稿のカバーに、これは「おおむね (dem Sinn nach)」第32章(当時はまだ清書稿の第33章だった)の反復となることになったと記したメモ[\*41]は、小説の今後の展開を示すものである。「楽園への旅」は、〈少佐夫人恋愛事件〉に似た変質を経験するように予定されていた<sup>50)</sup>。

『特性のない男』では、魂の試練は当然ながら水とかわってくる。少佐夫人の回想は、S<sub>4</sub>の一部とともに、第1巻第122章の一節で語られる。夜にひとりで家路をたどりながら、突然「なぜなのかはっきりとはわからなかったが」、ウルリッヒは若くして亡くなった「美しい母親」(〈遥かな愛〉)と幼少期の自分の古い写真を思い出し、「大いなるおののきから逃げおこせた (einem großen Schreck entronnen)」と感している。この謎めいた表現——大いなるおののきだけで済む (mit einem großen Schreck davongekommen) と大いなる危機から逃れる (einer großen Gefahr entronnen) の混合——は、〈少佐夫人恋愛事件〉の「たじろがせるような力 (abschreckende Kraft)」を反映したものである。さらに、彼を危険に陥れかねなかった世俗的成功は、金の檻ではなく金の網としてイメージされている。富ではなく、姦通したアプロディーテーとアレースがあざけりを浴びたやり口を示唆するかのように[\*43]。なぜ写真のことを考えたのかについて、ウルリッヒが「はっきりとは」わかっているというのは疑わしい。というのも、その写真は第32章で彼の頭に浮かんだ少佐夫人の「生気のない写真」に似ているように思われるからだ。(ふつう少佐夫人をほめかす箇所と結びつけられるたぐいの)「近い」と「遠い」について、彼の感情生活の両極性(第116章の「二本の樹」)について、幸せになる可能性についての考えにふけていると、彼は「行く手をさえぎる」——アンダースとウルリッヒの人生という「行く手 (Weg)」——大きな水たまり (Pfützte) に行き当たる。その水たまりは物質的な障害物ではない。二段落あとに彼は歩きつづけているのだから。水たまりがなぜ彼を長いあいだ立ち止まらせたかについては次の文にあらわれている。そこでは水たまり (Pfützte) は Lacke と言ひ換えられている。まるで湖 (lake) へと——あるいはさらに〈別の状態〉の海へと——拡張されたかのように。校正刷り原稿にムージルはこう書きこんでいる。Lache の代わりに Lacke にするつもりだ、と<sup>51)</sup>[Druckfahnen/131]。122章のこの一節は、独特の、断言を避けた留保をともなつてつづく。「ひょっとすると」この水が、「そしてひょっとすると木も」次々と連想を呼びさまし、ウルリッヒに茫漠とした穏やかさを思い出させたのかもしれない。それは都会人が田舎で経験するたぐいのもので、「若いころのあの初めての「逃走の旅」を繰り返すよう一度ならず彼を誘惑していた」。原文を文字どおり解釈すればこうなる。「あの「逃走の旅」以来、田舎の生活から生じる、充溢と空虚のあいだにある魂の単調な状態が、一度ならず繰り返しへと彼を誘



惑した」[\*44]。「なんの繰り返しなのか？」という疑問は以下の答えを求めているように思われる——「あの逃走の」、と。しかしムージルはあまり明白には語っていない。第32章において「これを最後に」といって少佐夫人と結びつけられていたあのたじろがせるようなものは、それが誘惑として思い出された以上もはや有効ではありえない、という印象が残るだけだ。古い写真との関連で、「大いなるおののき」<sup>52)</sup>から逃げおこせたとウルリッヒが認識するとともに、「たじろがせるような力」はその作用をやめているように思われる。

それにつづくのは、表面的には、猥雑な都会の喧騒とキャベツ畑のこの上ない平穏を交換したいという、知識人のあの周知の熱望についての説明である。しかし田舎に住んでいると「すべてがいかに単純になるか」とウルリッヒが考えているとき、彼はいわばティロールやゼメリング——作者は行くたびに数か月をそこで過ごしたものだ——のことよりも、少佐夫人の「大いなるおののき」から逃れた鳥のことを想定しているように思われる。というのも、彼はこう考えているからだ——「感覚はまどろむ (Die Gefühle schläfern)」。これは9 A-Agにおける晴れた日のまどろみと、より近いものとしては、アンダースがひとり海を見下ろしながら陽光のなかに横たわり、「感覚が眠りにつく (Die Sinne schläfern ein)」と語られている S<sub>4</sub>+8の両方を反映したものであるが、その二、三行あとで、短い通り雨の影響を「ある海岸から別の海岸への航行」になぞらえていることや、田舎では「神々はいまなお人間のもとへ来る」という寓意的な文章から、ここで意味されているのは風景というよりむしろ精神の状態であることがわかる。このことはつづく「遠近法」と幸福の同一視、また物語の順番の「糸」(＝人生そのもの)を保持すること——これは私的な生活においてしか可能ではなくなっているが——と幸福の同一視によって裏づけられている[\*45]。公の場では(つまり前述したようにムージルの作品でいえば)すべては「無限に織りなされた平面となって」広がっている<sup>53)</sup>。

校正刷り原稿における、Lacke という語の直後の少佐夫人からの逃走についての一節は手書きでの加筆である。それが、ウルリッヒが(作者のように)「しばしば」「田舎で数か月過ごした」という校正刷りでのそっけない言及にとって代わっている。「彼はそこへ戻るべきなのか」という問題への答えは、「[都会と田舎を]逆転させることは彼にとって決して問題にならなかった (ein Rücktausch kam für ihn gar nicht in Frage)」から、「決して真剣にとりあう問題にはならなかった (gar nicht ernsthaft in Frage)」へと変更されている。出版されたものでは「決して (gar)」が省かれている。揺れ動きながらも物事を未決定のままにしておくことを選んだ、この(きわめて特徴的な)一連の変更は、第32章の「恥ずべきことに [……] 自分はこれまでずっと [……] 帰らないでいた」、つまりウルリッヒが〈別の状態〉のあの島へと帰ろうとはしなかったという読者の認識をくつがえすように思われるかもしれない。このことは総じて、疑いなく第2巻における展開を示している。そこでウルリッヒは自分の孤独な (isolated/island) 状態を打破し、アトランティスのように失われたと彼がこれまで思っていた大陸を、つまり「正しい生」を探索しようとしている。

第1巻のまさに結末である、第123章の最後から二つ目の段落には、その主題をあつかった別

の文章がある。ウルリッヒはふたたび「別の状態」を、その「世界をくつがえす意味 (umstürzende Bedeutung)」を体験したところだった。つまり「より柔らかく、より広やかな状態 (einer weichere und weitere Zustand)」<sup>54</sup>を。それゆえ彼は、「何年も前にすでに一度いた場所に、自分がまた立っていること」を認めざるをえない。あざけるように彼は自分の状態を「少佐夫人の発作」と呼び、微笑みながら首を横に振った。「彼の理性の告げるところによれば、危険はなかった。というのも、このような愚行をとにも繰り返すことのできる人などいなかったのだから」。どんな愚行の危険なのか？ ある論者はこう補っている——「つまり、少佐夫人の発作が繰り返されること」。そして、正当にもつづけてこう指摘する。最初のエクスタシーは少佐夫人なしで起こったのだから、これはおかしい、と<sup>55</sup>。しかしウルリッヒの「発作」は、相手がいなくて思いどおりに繰り返せないというだけではない。ウルリッヒはそれが「愚行」だとは思っていないのだ。その「発作」は、「正しい生」(第2巻第22章、第1巻第62章)という全体的な状態(失われた大陸、愛から「失墜する」以前の人類)のぼらぼらの痕跡(島)である。そして、彼は「発作」のもつ豊かな可能性をいくらかでも実現できるよう自分の人生を賭けようとしている。彼が首を横に振ったのは20歳のときの誇張された陶醉と(ずっと前と言っているが、実際はたった12年前)、大部分は読者の目から隠されている、〈恋愛事件〉のエロティックな面にたいしてである。第1巻を初めて読む人はだれも、いま目前に迫っている新たな〈恋愛事件 (Geschichte)〉とはなにか推測できないだろう。しかし作者は、第2巻でついに近親相姦のテーマに取り組みねばならないことをつよく認識している(この小説はもともとこのテーマで始められることになっていた)。それなら、「愚行」とは「可能な恋人」(第1巻第62章)のこと、少佐夫人との擬似的な近親相姦のことを言っているのだ。それがなし遂げられるか、あるいは第32章のようになし遂げられないかについては、作者自身でさえ決めかねていたように思われる。ここでウルリッヒはこう決心したのだ。新たなかたちでの〈恋愛事件〉に——「もしそうでなければならぬのなら」——「ヨーロッパ人特有の」方法<sup>56</sup>、すなわち現実的なやり方で対処する、と。若者らしい「感傷 (Gefühlsduselei)」をともなってではなく、「正しい生」の実験として。

「夜の会話」においてムージルがどの稿における〈少佐夫人恋愛事件〉を考えていたにせよ、アガーテとともに「正しい生」を生きようとするこの新たな〈恋愛事件〉は「あんなふうにならなくなってしまった」というウルリッヒの宣言の意味するところに変わりはない。そこでウルリッヒは、少佐夫人への熱狂と同様の熱狂は「ある世界の発見」か、たんなる「ドン・キホーテ流の旅」か、どちらかにいきつくだろうとも語っている。島への旅はそのようなものだった。アガーテをともなった千年王国への旅は同じことの繰り返しなのか、あるいはある世界の発見なのか、この問いは読者に残されているのかもしれない。アガーテとの〈恋愛事件〉が、少佐夫人との(あるいは少佐夫人抜き)の〈恋愛事件〉とは別の結末を迎えることになったかという問題は、ムージルは『特性のない男』を完成させることができたかという問題と切り離すことができない。そしてこの二つの問題にはついぞ答えることができない。読者にできるのは〈恋愛事件〉の進展を観察することだけだ。未完の第52章「ある夏の日の息吹」の最後の言葉はその方

向性において曖昧である。ウルリッヒの考えでは、彼とアガーテは二人とも、ここで「現実主義者」と呼ばれる「食欲的」なあり方〔\*46〕とは対照的な瞑想家であるが、受動的な瞑想家と能動的な瞑想家のあいだで揺れている。三年前に書かれた第59章「夜の会話」では、これの元となっている一節をムージルは「現実主義」により接近した二通りのかたちで示した。新しい第52章でウルリッヒが考えていることは、以前の第59章では対話形式で示されている。ウルリッヒはそこで「食欲的」なあり方と、「特性のない男」、すなわち彼自身であり、「内気で、決断力に乏しく、名状しがたいあこがれの念にあふれている」あり方を対比させている。彼いわく、どちらも「おそらく (wohl) 彼自身がもつ側面である (つまり、彼はまだ多少は、ムージルが最後に書いた言葉で否定されていた「現実主義者」でもあるのだ〔\*47〕)。これにたいしてアガーテは「すばらしい、すばらしいわ！ あなたの言っていることを正しく理解することができたら、その人の人生は救われたでしょう！」と叫ぶ。おそらく、アガーテとの恋愛事件——少佐夫人との恋愛事件よりはるかに長くつづくが負けず劣らず「非現実的」である、アガーテとの恋愛事件——がひとつの山場を迎える第52章において、ウルリッヒの人生はまだ「救われて」いる〔\*48〕。

ムージルが自認する、形而下の現実への関心の欠如および形而下の現実に対処することの不能は、9 A-Ag 中の二つの点から見てとることができる。一つには、些細なことだが、正午よりずっと前にはじまった会話が、遅れた夕食の時間まで続いているということだ。アンダースとアガーテは、はじめは普段の調子でアガーテの遺言書偽造について話し（アンダースいわく、彼らは「現実のなかで」〔Mappe VII/9/122〕生きているのに、夢のような状態で罪を犯した）、正午の鐘が鳴ってからは、神聖かつ冒瀆的な愛について話している。「楽園の天使たち」（『特性のない男』第2巻第15章でこの言い方に修正された）が歯を磨く必要がないのと同様、昼食を食べることなど彼らは考えもしない。『特性のない男』第1巻第103章では、ウルリッヒはゲルダにこう尋ねる。「世俗から背を向けた状態で」君は朝どうやって歯を磨き、ハンスは税金の請求書を受けとるのか、と。同じ原則にのっとって、『特性のない男』第2巻では（計画されていた第69章までは〔\*49〕）、戻ってこいというハーガウアーの要求にアガーテが対処することもなければ、ハーガウアーがアガーテの遺言書偽造を発見することもなかった。歯を磨くこと、税金、三度の食事のように、登場人物たちの「現実の」生の世俗的な行為は〈遙かな愛〉とは調和しえない<sup>57)</sup>。二つには、9 A-Ag でアガーテが、あらゆるもののなかで最も厄介な現実の問題、つまり彼女が犯した遺言書の偽造を、ハーガウアーにたいして「すこし」懐柔的になることで——実際の観点からこの言葉がなにを意味しようとして——「片づけよう」と提案することだ。第59章「夜の会話」では彼女は自分の罪のことでみずからを責めるが、ウルリッヒはそれをさえぎって「ぼくたちはそれを償おう」と言う。これは新たなスタートを切ることへのアンダースの拒絶と比べてはるかに「正しい生」と調和する提案ではあるが、少々残念なことに、偽造問題についてムージルが晩年に記したわずかなメモからは、出版された巻にその問題が残っていることへの不安はうかがえるものの、彼がなんらかの実際的な解決案をもっていた形跡はない。これに反して、



第52章「ある夏の日の息吹」におけるハーガウアーへの言及は、そういうことをすべて「片づけてしまった」に等しいものである。この意味において（あらゆる意味において、というわけでは必ずしもないが）、この未完の小説はウルリッヒをいつまでもあの島に置き去りにしているのだ。あの山岳地帯にいる別名の主人公たちと同じように。

エンニャ・ウィルキンズ

ローマにて

### [解題]

以上が Eithne Wilkins: Musil's 'Affair of the Major's Wife': With an Unpublished Text. In: The Modern Language Review. Vol. 63, No. 1. January 1968 の全訳である。

„9. A-Ag.“ という草稿を紹介したこの論文は、〈少佐夫人恋愛事件〉を文献学的に考察する道を拓いたという点で、『特性のない男』研究史のなかで大きな意義を有している。くわえて、前号の付記でも述べたことだが、『特性のない男』第1巻第32章で描かれる〈少佐夫人恋愛事件〉の二つの草稿のうち、片方の „s<sub>3</sub>+n-1“ は1978年のフリゼー編 „Gesammelte Werke“ に収録されている一方で、この草稿 „9. A-Ag.“ は、現在にいたるまで（紙媒体では）この論文でしか読めない。„9. A-Ag.“ を読み解いてみると、ウィルキンズが本論文で主張していたように、この草稿が『特性のない男』における〈少佐夫人恋愛事件〉関連箇所の描写に影響を与えていることがわかる。„9. A-Ag.“ は、『特性のない男』における〈少佐夫人恋愛事件〉の位置づけを分析するうえで、豊かな可能性を秘めた草稿であると言えよう。

しかし、〈少佐夫人恋愛事件〉の文献学的分析を受け継ぎ発展させた研究はその後現れなかった。それにはおそらく、付記で述べたように、紹介された „9. A-Ag.“ という草稿の名称が誤っていることも大きくあざかっているだろう（この問題については後述する）。しかしそれだけではなく、この論文自体が問題をはらんでいるからかもしれない。ウィルキンズのこの論文は〈少佐夫人恋愛事件〉という一貫したテーマこそあるものの、さまざまな題材が次から次へと論じられるため、論点が把握しにくい構成となっている。内容を簡単に振り返ってみると、前半においては、〈少佐夫人恋愛事件〉にまつわる問題提起がなされる。『特性のない男』で描かれる〈少佐夫人恋愛事件〉は、「読者が知らない事柄」として、また「物語のなかでまったく機能していないエピソード」として現れる<sup>(1)</sup>。たとえば、第2巻第12章でアガーテに過去の恋愛体験について問われたウルリッヒは、「ああ、それについてはもう話したよ」と返事しているものの、〈少佐夫人恋愛事件〉をウルリッヒがアガーテに語る場面は刊行された『特性のない男』のなかにはない。さらに、第1巻第32章で〈少佐夫人恋愛事件〉をウルリッヒが思い出したさいに、「滑稽なほど魅力的な体験」であるにもかかわらず「たじろがせるような (abschreckend)」というネガティブな言葉が使われているのはなぜかという問題や、ウルリッヒと少佐夫人が肉体関係をもつのを阻む「本来存在しない障害物」<sup>(2)</sup>とは何かという問題が提出される。これらの謎を解く鍵となる

のが、„9. A-Ag.“という草稿である。この草稿と完成稿とを照らしあわせてみると、先述した第2巻第12章の場面は„9. A-Ag.“を下敷きにしたものだと考えることができるし、ほかにも第2巻第22章で言及される「山岳地帯での晩秋の日々」というのも、同じく„9. A-Ag.“と密接に関係した記述だということが明らかになる。ウィルキンズはまた、第1巻第32章と„9. A-Ag.“における、ウルリッヒとアンダースの年齢のちがいに注目する。ウルリッヒは「20歳」だったが、アンダースは「まだ20歳になっていなかった」。そこからウィルキンズはムージルの伝記的事実に目を向ける。1901年、ムージルが20歳のとき、彼は少佐夫人のモデルと目されているヴァレーリエなる女性に恋をした（ヴァレーリエ体験）。そして「18歳か19歳」だったときには、彼は湖の飛び込み板の上に立つ母親の裸体を目撃し、その美しさに見とれるという体験をしている。この二つの体験が起こったのは両方ともフェルデンという場所だということから、〈少佐夫人恋愛事件〉にはムージルと母の近親相姦的なエピソードが反映されているとウィルキンズは推測する。さらに、同じく1901年にムージルが梅毒にかかっていたことから、それも〈少佐夫人恋愛事件〉を構成する重要な要素になっていると考察されている。つまり、第1巻第32章において〈少佐夫人恋愛事件〉が「たじろがせるような」位相を持っており、ウルリッヒと少佐夫人が「障害物」によって性行為にいたることができないのは、ムージルの伝記的事実にもとづく近親相姦タブーと梅毒が原因なのだ、という結論をウィルキンズは提示している。

伝記研究の進展により、現在ではウィルキンズが論の拠りどころとした個々の事項は誤っていることがわかっている。ムージルがヴァレーリエ体験をしたのは1900年の秋、つまりムージル19歳のときであり（訳註28参照）、彼が梅毒にかかったのは1902年のことであった（訳註35参照）。そしてヴァレーリエ体験と母親との体験をした場所は同じではなく、後者はフェルデンであるが、前者はシュラートミング近郊のフィルツモースだった（訳註30参照）。こうしたことが次々と明らかになってゆくなかで、この論文はすでに乗り越えられたものと見なされ、„9. A-Ag.“もろとも忘れられていくことになった。しかし、問われるべきはこうした誤りよりもむしろ、ウルリッヒと少佐夫人とが肉体関係を持たなかった理由を近親相姦タブーと梅毒に求め、「それ以外には説明がつかない」（290頁）と断定してしまっているところであろう。性行為を忌避する原因を肉体的な次元に求めるという姿勢からは、ウルリッヒが逃げた先の島で神秘体験をした理由にも、肉体関係を持ったあとのアンダースが「魂を失っ」たと語る理由にも、迫ることはできない。クラゲンフルト版全集が発表され遺稿研究が活性化しているいま、„9. A-Ag.“を文献学的に取りあげ、しかもウィルキンズとはちがった立場から分析することは、意味のないことではないだろう<sup>(3)</sup>。

本論文の著者エンニャ・ウィルキンズ（1914-1975）はニュージーランド出身の翻訳家である。彼女はオーストリア出身の作家エルンスト・カイザーとともに1950年から『特性のない男』の英訳に携わっていたが、そのさなかに、アードルフ・フリゼーによって編集された„Der Mann ohne Eigenschaften“（1952）を読み、内容に疑念を抱いた。それは、1932年に出版された『特性のない男』第2巻の第38章以降の部分が、「遺稿部より、第3部の結末と第4部」という

表題のもと編者フリゼーの手で構成されていたからである。フリゼーの編集方法は恣意的なものではないかと疑った彼女らは、ロンドン大学ベッドフォード・カレッジから研究助成金を受け、ムージルの遺稿を確認するために1953年にローマに赴いた。1万頁を超えるムージルの遺稿は、1949年のマルタ・ムージルの死後、彼女が二人目の夫とのあいだにもうけた息子でローマ在住のガエターノ・マルコヴァルディの手に渡っていたのである。そして実際に遺稿を目の当たりにして、二人は愕然とする。全集の「遺稿部より、第3部の結末と第4部」は『特性のない男』以前の草稿も含めたムージルの遺稿をフリゼーが恣意的につぎはぎして作り上げたものであり、しかもムージルの書いた語句がフリゼーによって改変されている箇所さえあったからである。後に書かれた研究書 „Robert Musil. Eine Einführung in das Werk“ (1962)の前書きで、彼女らはフリゼーの編集にたいし手厳しい批判を加えている——「未完に終わったローマを完成させたいと願うあまり、フリゼーがどれほどムージルの遺稿を改変し、微細な点にいたるまで、テキストを自分の目的に合わせてゆがめてしまったことか」<sup>(4)</sup>。

かくしてウィルキンズとカイザーはローマでみずから遺稿の編集作業にとりかかった。彼らは遺稿の一枚一枚にページ番号を打ち、目録の作成にあたったが、この作業はのちにカール・コリーノとエリーザベト・アルベルツェンに引き継がれることとなる。そのかたわら遺稿の写しが作成され、それらはクラゲンフルトのローベルト・ムージル・アルヒーフやザールブリュッケンの研究グループなどの手に渡り、複数の場所で並行して遺稿研究が進展した。テュービンゲンのヴィルヘルム・パウジンガーも写しを入手し、1964年にフリゼーの全集を批判した „Studien zu einer historisch-kritischen Ausgabe von Robert Musils Roman ‘Der Mann ohne Eigenschaften’“ を出版する。そして当のフリゼー自身もこのような遺稿研究に携わり、1976年には彼の編集による新版の日記 (Tagebücher. 2 Bde. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1976) が、そして1978年には全集 (Gesammelte Werke. 2 Bde. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1978) が出版された。1952年にフリゼー編『特性のない男』が出版されて以降、その編集の妥当性を検証するために研究者たちがしのぎを削って遺稿研究を進展させ、それを経てフリゼーの手で原典批判的な全集が作りあげられた。現在もなお続くこの遺稿研究の草分けとなった人物こそ、本論文の著者であるエンニャ・ウィルキンズなのである。

しかしこの1978年のフリゼー版全集に、1968年に本論文ではじめて紹介された草稿 „9. A-Ag.“ は採録されていない。この全集には膨大な量の遺稿がすべて収録されているわけではない。問題なのは、その選定基準をフリゼーが明らかにしていないことである。しかも、付記ですでに述べたことだが、現在刊行中のヴァルター・ファンタ編 „Gesamtausgabe“ Bd. 1-6 (2016-2018) にもこの草稿は載っていないのである。ただし、この新しい全集は遺稿を「文学的読み物」として再構成するという目標のもと編まれたものである<sup>(5)</sup>。 „Gesamtausgabe“ Bd. 6 (2018) では、『特性のない男』の前身である「スパイ (Der Spion, 1919-1920)」、「救済者 (Der Erlöser, 1921-1922)」、「双子の妹 (Die Zwillingsschwester, 1924-1925)」、「章群 (Die Kapitelgruppen, 1928)」それぞれの段階における草稿が編者ファンタによって章番号を付され再構成されている。

つまり遺稿をもとにファンタの描いたストーリーから外れている草稿は載っておらず、おそらく „9. A-Ag.“ もその憂き目をみたのであろう。いずれにせよ、紙媒体の全集で „9. A-Ag.“ が読めるものは、現在にいたるまでこのウィルキンズの論文しか存在していない。1978年のフリゼーの全集から漏れてしまって以降、この草稿はまるで忘れられてしまったかのような様相を呈している。

ところで先ほど「紙媒体の全集で」という留保をつけたのは、二つのデジタル版全集——CD-ROM版の „Der literarische Nachlaß“ (1992) およびDVD版の „Klagenfurter Ausgabe“ (2009) ——ではこの草稿を読むことができるからである。1984年からトリーア大学とクラゲンフルト大学で作成された、ムージルの手稿を電子媒体に文字起こしたトランスクリプションという形で、これらの全集にはすべての遺稿のデータが収録されている。ただし、この二つの全集に収録されているこの草稿は、ウィルキンズの主張するように „9. A-Ag.“ という名ではない—— „Der literarische Nachlaß“ 以降、この草稿は „s<sub>3</sub>+9“ という名で呼ばれることとなったのである。

ここで、ウィルキンズがこの草稿について説明している段落を振り返って、その主張を整理しておこう<sup>(6)</sup>。〈少佐夫人恋愛事件〉について考える手がかりとなる草稿は三つ存在しており、それぞれ „s<sub>3</sub>+n-1“ と „s<sub>3</sub>+9“、そして „9. A-Ag.“ と呼ばれている。これらは1925年某日から1928年10月のあいだに書かれた草稿で、このうち二つは第1巻第32章の〈少佐夫人恋愛事件〉のヴァリエーションである。ウィルキンズが問題にしている „9. A-Ag.“ は、 „s<sub>3</sub>+n-1“ あるいは現存しない „s<sub>3</sub>+9“ にもとづいて書かれた草稿である。現存しない草稿に依拠しているということがなぜわかるのかというと、“two double sheets” から成る „9. A-Ag.“ の二枚目に „s<sub>3</sub>+9“ という記号が付されているからである。そしてこの „9. A-Ag.“ は、“cover-sheet” 上では名称が9から10に修正され、『特性のない男』のために1928年に考え出された「章群」という枠組みのなかに、詳しくいえば第2巻第3章群に含まれているという——なんとも、わかりにくい説明ではないだろうか。まず指摘される問題点としては、この草稿 „9. A-Ag.“ の出典が明記されていないことであろう。そしてこうも理解しがたいものになっている最たる理由は、“9. A-Ag.“ がどのような形状をしているか一読してわからないという点にあるだろう。“two double sheets” で構成されており、“cover-sheet” があるということはわかっても、それが具体的にどのような草稿であるかをイメージするのは難しい。

まず私たちは、この „9. A-Ag.“ がオーストリア国立図書館に所蔵されているムージルの遺稿<sup>(7)</sup>のうち „Mappe VII/9/122-129“<sup>(8)</sup>に当たる部分であることを突き止めた。おそらくウィルキンズはこの草稿をローマでの遺稿整理時に発見したが、当時はたとえば „Mappe VII/9/122-129“ のように遺稿の所在を指示する形式が確立されていなかったため、出典を記すことができなかったであろう。そして、私たちはオーストリア国立図書館に依頼してこの草稿の写真データを送ってもらった。その結果わかったのは、“two double sheets” とは、1枚の紙を二つに折って計4ページの冊子状にしたもの二つ、を意味しているということである。この半分に折られた2枚の紙は、

おなじく半分に分かれた1枚の紙でまとめて包まれている<sup>(9)</sup>。この紙がウィルキンズの言う“cover-sheet”であり、遺稿の„Mappe VII/9/121“に当たる。ここには„10. A-Ag.“(ウィルキンズの言うとおり、最初は9と書かれていたものを10に修正してある)と表題があり、その下にはメモ書きのようなかたちで„10. A-Ag.“の内容が書かれている。この内容は実際、表紙に包まれた2枚の紙に書かれた内容とほぼ一致している。しかし、中身の紙のうち1枚目の最初のページには見出しとして„9.“という文字があるだけであり、2枚目の最初のページ„Mappe VII/9/126“には„s<sub>3</sub>+9“と書かれている。ウィルキンズはこの„s<sub>3</sub>+9“を、現存しない草稿„s<sub>3</sub>+9“にたいする参照指示だと解釈したのかもしれない<sup>(10)</sup>。しかし前述したように1992年の„Der literarische Nachlaß“以降、表紙に書かれた„9.(正確には10) A-Ag.“ではなく中身の原稿に書かれた„s<sub>3</sub>+9“が名称として採用されている。それでは、どちらの主張が正しいのであろうか。名称が変更された理由について述べた文献は見当たらず、私たちはクラージェンフルト版および現在刊行中の全集の編者であるヴァルター・ファンタ氏にメールで問い合わせしてみた。しかし氏の答えは二転三転し、最終的にはどちらかわからないという不確かなものであった。しかしその後も調査をつづけた結果、この„Mappe VII/9/122-129“はやはり„s<sub>3</sub>+9“と呼ぶべきだと私たちは判断するに至った。

ムージルの膨大な草稿は彼の手によって記号でグループ分けされており、草稿の名称はそれがどの草稿群に属しているか、およびその草稿群のなかのどこに位置しているかを表している。たとえば„s<sub>3</sub>+9“なら„s“草稿群に分類され、„s“草稿群内の第3グループの9番目に位置する、というふうに。„s“草稿群は「Sテキスト」という名で日本語版全集にも収録されており<sup>(11)</sup>、クラージェンフルト版によれば成立は1923年初頭-1925年で、断片的なメモではなく文章としての体裁が整った草稿である<sup>(12)</sup>。一方で、ウィルキンズの主張するようにこの草稿が„9. A-Ag.“ならこれは„A-Ag.“草稿群<sup>(13)</sup>に分類されることになるのだが、おなじ„A-Ag.“という記号が付されている草稿にも「A-Ag.+(ローマ数字)」というタイトルのもと(たとえばA-Ag. IV)、「(アラビア数字).+A-Ag.」というタイトルのものである(たとえば4. A-Ag.)。前者は1923年-1926年成立だとされており、„s“草稿群と「章群」のあいだの時期に書かれた草稿群で、メモにとどまっているものもあれば、きちんとした文章になっているものもある。それにたいして、後者は「章群」という計画成立後の1928年-1929年に成立しており、アラビア数字は「章群」内の章番号を表している(たとえば第2巻第3章群の„9. A-Ag.“ならば、第2巻第3章群のなかの第9章、というふうに)。そして後者はすべてメモにとどまっている草稿ばかりである。本論文で紹介された草稿が„9. A-Ag.“ならば、9がアラビア数字であるため後者の„A-Ag.“草稿群に分類される。しかし後者の„A-Ag.“草稿群はどれも断片的なメモにとどまっており、そのうち„9. A-Ag.“だけがきちんとした文章の体裁をとっているとは考えにくい。

さらに、具体的な単語に注目してこの草稿の成立年代を特定することもできる。手がかりとなるのは、„Mappe VII/9/121“にある„10 Knöpfe“と„Mappe VII/9/122“にある„Die 10 Pkte.“である。この„Knöpfe“および„Pkte. (=Punkte)“はどちらも一読して意味がわかりづらい語であるが、



„Knöpfe“は『特性のない男』第2巻第29章でハーガウアーの性格について語られるときの「ボタン方式 (Verfahren der Knöpfe)」という言葉に関係がある。この言葉は、ハーガウアーのモデルとなったゲオルク・ケルシェンシュタイナーが『自然科学教育の本質と価値』(1914)<sup>(14)</sup>においてデューイの思考プロセスについて説明した箇所に由来している<sup>(15)</sup>。『特性のない男』で説明されているところによれば、この「ボタン方式」とは「自分の考えにたいし、しかも感情を刺激してくるような課題を前にしたときでさえも方法論的に働きかけることである。これは自分の服に[……] ボタンを縫い付けさせるのと似ている」[Lesetexte II/457]。具体的には、デューイがモデルになっていると思いきサーウエイという作家の思考の「5のボタン」について、それぞれ「a) ある事件を観察してその解明の難しさを感じとること、b) この難しさとはなにかを絞りこみ突き止めること、c) 可能な解決法を推定すること、d) この推定の結果を理性的に発展させていくこと、e) この推定を採用するあるいは拒絶するためにさらに観察し、そうすることで思考を成功に導くこと」[Lesetexte II/457]と述べられている。このようにボタンを一つ一つ嵌めていくように段階を踏んで問題に対処するという堅実なハーガウアーの人物像は草稿段階から考えられていたものであり、そうした性格を表すさいに先ほど『特性のない男』でみたような„Knöpfe“という語が用いられる。そして、„Pkte.“は„Knöpfe“と同じ意味で用いられている。まずは1923年-1926年に成立した„L 61“ [Mappe II/8/215-216] というメモの、„s<sub>3</sub>+9“に言及した部分を見てみよう。

7. s<sub>3</sub>+9. アンダースの手紙への返事。「決闘用の手袋」を手にとる

10 項目 [=Pkte.]。アガーテのことを精神病質だと思う。

正確なりストと証明書を要求する。

繰り返す：誤謬、第二の遺言書。すり替え G 8r [Mappe II/8/215]<sup>(16)</sup>

次にこの„L 61“に言及した1928年9月-1929年1月のメモ„Frage 5“には、このようにある。

3. 決闘用の手袋を手にとる

a. 10のボタン [=Knöpfe]。アガーテのことを手紙で、  
神経病だと説明する

b. 正確なりストと証明書を要求する

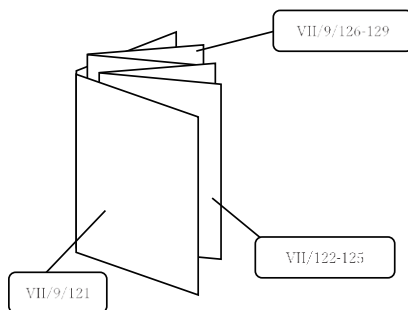
なおも説明する、誤謬や手抜きがあると信じている、と。[Mappe II/1/199]<sup>(17)</sup>

以上の二つの引用から、„Pkte.“と„Knöpfe“は同じ意味で用いられた語であることがわかる<sup>(18)</sup>。しかしこの二語は、使われている時代がちがう。1920年代前半から後半にかけて、„Pkte.“から„Knöpfe“へと変化しているのである。1923年-1926年に成立した„L 61“や1924年-1926年に成立した„Curr 41“ [Mappe II/1/272] では„Pkte.“が使われているが、1928年9月-1929年1月に

成立した „Frage 5“ や 1928 年 9 月-1930 年 10 月に成立した „Zum Ausgleich I u II“ [Mappe II/1/221] では „Knöpfe“ が使われている。そして問題になっている草稿に話を戻せば、前述したように、カバー „Mappe VII/9/121“ では „Knöpfe“ となっているが、その中身 „Mappe VII/9/122“ においては „Pkte.“ だ。たしかにカバーに書かれている出来事はその中身と内容上一致をみているが、しかしこうして単語レベルで分析してみると、カバーと中身とは成立年代が異なることが浮かびあがってくる<sup>(19)</sup>。ウィルキンズはカバーと中身が同時に成立したと考えてこの草稿を „9. A-Ag.“ と呼んだが、それは誤りだった。つまり „Pkte.“ が用いられたこの草稿は、„Mappe VII/9/126“ にあるように、1923 年初頭-1925 年に書かれた „s<sub>3</sub>+9“ だったのである。この „s<sub>3</sub>+9“ はおそらく、ムージルが 1928 年に「章群」を計画したさいに、第 2 巻第 3 章群第 10 章の素材として利用するために抜きとられて „10. A-Ag.“ という表紙をつけられたのであろう。

これで文献学的には „9. A-Ag.“ / „s<sub>3</sub>+9“ 問題は解決をみたわけだが、しかしなぜ „s<sub>3</sub>+9“ はファントの最新版の全集 „Gesamtausgabe“ に掲載されていないのか、そもそも他の „s<sub>3</sub>“ 草稿と „s<sub>3</sub>+9“ とは内容上どのような関係にあるのかという問題は残ったままである。ムージルはメモのなかで、„s<sub>3</sub>+9“ で描かれた恋愛事件を第 2 巻第 3 章群第 10 章の内容として組みこもうと計画していた [Mappe II/1/203]。この草稿の „s<sub>3</sub>“ 草稿内における位置づけはいかなるものであったか、ひいては、ムージルはどのような意図でこの草稿を書き、小説にどう組み込もうとしていたのか——こうした問題についての論究は別稿に譲ることとする。

- (1) 白坂彩乃・大川勇「〈翻訳と解題〉エンニャ・ウィルキンズ「ムージルの〈少佐夫人恋愛事件〉——未発表のテキストとともに」(1)」、『社会システム研究』第 22 号、329 頁。
- (2) 白坂彩乃・大川勇「ムージルの〈少佐夫人恋愛事件〉(1)」、334 頁。
- (3) その試みの一つとして、白坂彩乃・大川勇「〈少佐夫人の物語〉の二つの草稿——ムージルの〈遙かな愛〉を理解するための基礎作業として」、京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会『ドイツ文学研究』報告第 64 号、2019 年。
- (4) Ernst Kaiser/ Eithne Wilkins: Robert Musil. Eine Einführung in das Werk. Stuttgart 1962, S. 15.
- (5) Gesamtausgabe, Bd. 6, S. 709.
- (6) 白坂彩乃・大川勇「ムージルの〈少佐夫人恋愛事件〉(1)」、336 頁。
- (7) ムージルの遺稿は 1972 年にローマのマルコヴェルディの手を離れ、ウィーンのオーストリア国立図書館で管理されることになった。Elisabeth Castex: Probleme und Ziele der Forschung am Nachlass Robert Musils. In: Colloquia Germanica 10 (1976), S. 269.
- (8) 後述するように、„Mappe VII/9/122-129“ の現在の名称は „9. A-Ag.“ ではなく „s<sub>3</sub>+9“ である。草稿 „s<sub>3</sub>+9“ のページ数については、訳註 25 を参照。
- (9) „Mappe VII/9/121-129“ の見取り図はこのようになる。
- (10) ウィルキンズは「現存しない」と言っているが、„s<sub>3</sub>+9“ という名の草稿は „Mappe VII/6/22“ に存在している。ただしこの „s<sub>3</sub>+9“ は „Für-In“ というテーマ



について書かれたものであり、本論文で紹介された „s<sub>3</sub>+9“ が描いている内容とは直接的な関係がないため、ウィルキンズは „Für-In“ を描いた „s<sub>3</sub>+9“ とは別の „s<sub>3</sub>+9“ が存在したはずだと推測したのではないかと思われる。

- (11) 『ムージル著作集』第6巻、加藤二郎訳、松籟社、1995年。
- (12) ファンタはテキストの段階としてメモ (Notiz) と草稿 (Entwurf) とを区別しており、クラークンフルト版においても遺稿は同様の基準で分類されている。ファンタの説明によれば、メモとはそれ自体をテキストの一部とする意図のもとで書かれたのではないものを指し、草稿とはそれをそのままテキストに用いる意図のもとに書かれたものを指す。Walter Fanta: Die Entstehungsgeschichte des „Mann ohne Eigenschaften“ von Robert Musil. Wien 2000, S. 54.
- (13) A-Ag. とは Anders-Agathe の略である。
- (14) Georg Kerschensteiner: Wesen und Wert des naturwissenschaftlichen Unterrichts. Leipzig/Berlin 1914.
- (15) ムージル自身メモのなかでデューイについて言及しており、たとえば「デューイの論理的思考の過程の5段階 (5 Stufen)」[Heft 21/10]、「デューイの5のボタン (5 Knöpfe)」[Mappe II/1/221] などがある。
- (16) ここで言われている „s<sub>3</sub>+9“ の内容は „Mappe VII/9/122“ の冒頭に書かれていることとほぼ一致している。日本語訳は以下のとおり。

ハーガウアーは知らせを受けとった。「決闘用の手袋」を手にとる。  
アガーテのことを精神病質だと思う。(彼女に反対する 10 項目)。  
正確なりストと証明書を要求する (離婚の欲求と  
遺言書の誤謬にかんしての沈黙への返答として。s<sub>3</sub>+7/1ff  
繰り返す：誤謬、第二の遺言書。、すり替え。G 8r.

ちなみに „Mappe VII/9/122“ の最初の三分の一ほどはこのような「メモ」の形をとっているが、そこから終わりの „Mappe VII/9/129“ までは「草稿」の形で書かれている。「メモ」と「草稿」のちがいについては註 (11) を参照。

- (17) 引用部には記せなかったが、a. と b. を入れ替えるよう指示する矢印が書かれている。実際 „Mappe VII/9/121“ にも似た記述があるが、そこでは a. と b. の順番は逆になっている。
- (18) さらにもう一つ例を挙げると、ハーガウアーの説明として「10 項目の男 (Mann der 10 Pkte.)」[Mappe II/8/215] と言われている。
- (19) このように、草稿の表紙と中身の成立年代は必ずしも一致しない。そのような草稿はほかにも存在し、たとえばアンダースとアガーテの「楽園への旅」を描いた „s<sub>4</sub>+1-16“ は第2巻第4章群というタイトルの表紙を付けられている („Mappe VII/9/154-184“ を参照)。

### [凡例]

- 1 原註は 1)、2) … という形で示し、解題の後にまとめた (今回は 32)、33) … となる)。
- 2 訳註は [\*1]、[\*2] … という形で示し、原註の後にまとめた (今回は [\*26]、[\*27] … となる)。  
ただし本文の補足説明として必要とした場合は、[] でくくり、本文中に組み込んだ。
- 3 原典からの翻訳に際しては、クラークンフルト版全集 (Klagenfurter Ausgabe. Kommentierte Edition sämtlicher Werke, Briefe und nachgelassener Schriften. Mit Transkriptionen und Faksimiles aller

Handschriften. Hrsg. von Walter Fanta, Klaus Amann u. Karl Corino. Klagenfurt 2009. Update 2015) に依拠し、ここからの引用は [Mappe VII/9/122]、[Heft 36/49] の形式で本文中に示した。„Mappe“ および „Heft“ 以下の数字は [Mappengruppe/Mappe/Pagina]、[Heft/Pagina] の順番に付し、上記の例では [ファイル群 VII/ ファイル番号 9/122 ページ]、[ノート番号 36/49 ページ] を意味する。

[原註]

- 32) TB, 73ff. 1907 年から 1908 年にかけての冬、近親相姦的な愛（「狭い家畜小屋に詰め込まれる」ことに比されている）についての導入となる段落では相手が母親から妹に移されており、また別の直喩が付け加えられている——「あるいは、海での秋のように」、と。ここでアガーテの名がはじめて登場する。
- 33) PD, 549ff. つづりと句読点を修正した（ムージルはたとえば Margérite と書いている）。PD, 554 の「森のなかへ（ins Bois）」は「グルーネヴァルトへ（in den Grunewald）」の修正であり、ここから手稿が 1903 年 9 月にムージルがベルリンにやってきてからのものであることがわかる。
- 34) TB, 32. いつものように、ムージルは「Göthe」と書いている。
- 35) TB, 34.
- 36) An [アンダース] 9 という紙片 [Mappe VII/10/12]（ノート 4 の記述 (TB, 34) への言及付き）。
- 37) TB, 32 および 1905 年 6 月 19 日の日記 (TB, 91)、加えて公表されていないたくさんのメモ。ノート 25（1923 年頃）には次のようにある。「若いころに一度「愛の状態」（恋に落ちた状態とは別のもの）に入りこんだ人は多い。[……] そこで人びとはお互いに「善意のなかで出会う」といわれている。ほとんど、場所を指し示す空間としての「状態」のなかで。| 贈りを与えようとすることであり、自分のものにしようとするのではない。| 倫理的な関係が別様になる。主要なもの副次的なものが入れ替わる。| 善くあろうと思うことは、与え、贈り、分かち、あふれ出ることである。| これと類似しているのは詩の状態である」[Heft 25/12]。TB, 281 および原註 18 を参照されたい。
- 38) 部分的に詩の形式に直されたヴァレーリエへの手紙の草稿（1901 年 [クラゲンフルト版では 1902 年]）は、少佐夫人に宛てたウルリッヒの最後の手紙を予感させるものである。「どうして僕は手紙を書かないのか？ | でも僕はたえず君に手紙を書いている！ [……] | でも君に書いているのではない。| そして | 僕はいまほど君の近くにいることはめったにないんだ、いまほど僕自身の近くにいることなどめったにないのだから。僕は敬虔に野蛮人たちのあいだを歩きまわる。[……] 敬虔に——それは彼岸の国ではない——しかしこの世界の向こう側にある国なのだ。[……] そして野蛮人たち。彼らがそうなのだが——彼らは充溢した魂は祈るということを知らない——そして彼らは知らない。祈ることはただ充溢した魂のためだけのものであり、なにか力にあふれたもの——微笑んでいるもの——信仰から遠く離れたものだということを」[Mappe IV/2/114]。
- 39) TB, 426.
- 40) 修正された稿では自画像的な描写が省かれている (TB, 30f.)。ウルリッヒは最後の詩を 20 歳のときに書いた（第 2 巻第 22 章）。
- 41) Karl Dinklage: Musils Herkunft und Lebensgeschichte. In: *Robert Musil. Leben, Werk, Wirkung*. Im Auftrag des Landes Kärnten und der Stadt Klagenfurt, herausgegeben von Karl Dinklage (Wien 1960), S. 209f. 9 A-Ag に出てくる地形は、山々のなかに聖地があるということも含めてヴェルター湖の地形と一致している——その山はおそらくはシュテルンベルクだが、ひょっとすると四つの聖なる山の二つ目であるウルリッヒスベルクかもしれない。「その山は、地質学的に見ても、島のように周囲から際立って見える」[\*32] (Siegfried Hartwagner: *Das Zollfeld. Eine Kulturlandschaft* (Klagenfurt 1957),

- S. 151)。
- 42) TB, 177.
- 43) PD, 640.
- 44) TB, 77.
- 45) TB, 33. TB, 55 を参照されたい。
- 46) 原註 26 を参照。
- 47) 原註 37 の「ほとんど、場所を指し示す空間」の箇所、および第 2 巻第 21 章、アガーテが千年王国についてのウルリッヒの話の思い出す場面を参照（「彼の言葉から、[……] 本当に彼女の足元に国がつくられたかのように」）。多くのメモや草稿から、神秘的なユートピア、第 2 巻第 38 章の「どこにもない国 (Nirgendland)」にたいして同じ姿勢が示されていることがわかる。
- 48) テキストは *Studien*, 75a-98a を参照。1952 年のフリゼー版『特性のない男』「遺稿部より、第 3 部の結末と第 4 部」第 94 章を参照されたい。この比較資料は *Studien*, 421-462 を参照。断片的な草稿は 1922 年 8 月にさかのぼる。
- 49) 少佐夫人は皮肉にも「センチ・メンタルな恋人 (die senti-mentale Geliebte)」ヴァレリーエへとおとしめられ、ボナデアというあだ名がつけられた。次の段階は、ボナデアの本当の名前をアンナにすることだった [\*39]。それは表向きはムージルが結婚すると思われていた女性であり、彼女に宛ててムージルはしぶしぶ「アンナ書簡」を書いていた [\*40]。小説中では、アルンハイムがこれをディオティーマに書くことになっていた。
- 50) 1930 年の秋から 1932 年の秋までのあいだ [クラーゲンフルト版では 1933 年中葉-1934 年 3 月]、第 2 巻 [第 3 部] のタイトルがまだ「犯罪者たち (Die Verbrecher)」だったとき、そこには「……への旅 (Die Reise ins...)」[Mappe I/3/15] というサブタイトルがつけられることになっていた。楽園へ? それとも千年王国へ? 出版時のタイトル (1933 年 [正しくは 1932 年]) は「千年王国へ」、その下に小さい文字で「(犯罪者たち)」とあった [\*42]。 *Studien*, 680, 12 を参照。
- 51) ヴィーン方言の die Lacken ではない。クルーゲとグリムの辞書からのメモ [グリムの辞書からのメモは Mappe VI/1/195] が示しているように、ここでは「湖 (lake)」との関連をつくりあげようと試みているのだ。「救済者 (Erlöser)」のノートでは湖 (der See) と海 (die See) は取り換え可能なものとして、「大洋」感情を象徴するために用いられている。第 2 巻第 22 章における水たまりと大洋の対比を参照されたい。
- 52) 金の網のことを言っているのだろうか? TB, 56 のヴァレリーエ体験にもとづく小説構想を参照されたい。「彼の理性より深く、その糸はすでにもつれはじめた。[……] このもつれへの抵抗」。対照的に、[神秘体験のなかで]「錯綜した思考のもつれが解きほぐされた」。また TB, 85f. の『テルレス』の草稿も参照。そこにはヴァレリーエのような母親的な人物がいて、彼女のなかに少年は「包みこまれて」いた。「たくさんの綿の糸のなかにいるように!」。そして第 122 章でウルリッヒは彼のことを「坊や (Kleiner)」と呼ぶ売春婦にやさしく話しかけ、金を与えて追い払い、モースブルッガーを釈放するという狂った考えをしりぞける。そこではモースブルッガーは恣意的に「売春婦狩り (Prostituiertenjäger)」(そうではないが) および「売春婦の根絶者 (Prostituiertenvertilger)」と呼ばれる。
- 53) 1931 年 1 月 26 日のベルナル・ギユマン宛の手紙の下書きを参照されたい (PD, 724ff. とりわけ PD, 726)。
- 54) 1952 年のフリゼー版『特性のない男』にある「晴れやかな (heiteren)」ではない。
- 55) Dieter Kühn: *Analogie und Variation* (Bonn 1965), S. 153, Anm. 54.
- 56) 〈別の状態〉についての文脈で、ムージルはいつもの習慣で「ヨーロッパ人的」と「現実的」、「実際



的」を同一視している。1931年頃〔クラゲンフルト版では1933年中葉-1934年3月〕のメモには、「少佐夫人」テーマに言及したあと、〈別の状態〉を求めてのイタリアへの兄妹の旅について以下のような記述がある。「旅はこの問題への挑戦であるだけでなく、ヨーロッパ共同体のなかでこの問題を解決することからの逃避でもある」〔Blaue Mappe/5〕。

- 57) 〈遙かな愛〉は他者の感情を考慮するのを度外視することも多い。たとえば召使いにたいするアンダースの態度は冷淡である。『特性のない男』の最後の何章かで大いに議論されているテーマは「隣人愛 (Nächstenliebe)」である。

### [訳註]

- \*26 「騎手が馬にたいして抱くのと同じ情熱を、僕は認識することに抱いていた」(白坂彩乃・大川勇「ムージルの〈少佐夫人恋愛事件〉(1)」、330頁)を参照。
- \*27 ウィルキンズは、ムージルがヴァレーリエ体験をした場所と母親と近親相姦の体験をした場所を同じ場所だとして以後の論を組み立てているが、この二つの体験の場所は同一ではないことがのちの研究によって明らかになっている。詳しくは訳註30を参照。
- \*28 以後ウィルキンズは、ムージルがヴァレーリエ体験をしたのが20歳のときだということを手がかりに論を進めていくが、これは誤りであることが現在では明らかになっている。『ムージル伝記』によれば、ヴァレーリエ体験は1900年の初秋、ムージル19歳のときに起こった(Karl Corino: Robert Musil. Reinbek bei Hamburg 2003, S. 155f. 邦訳『ムージル伝記』第1巻、早坂七緒/北島玲子/赤司英一郎/堀田真紀子/渡辺幸子訳、法政大学出版局、2009年、162頁)。
- \*29 ウィルキンズは以後、〈遙かな愛〉を母親との近親相姦タブーによって説明しようと試みている。ウィルキンズの立場については解題を参照。
- \*30 ウィルキンズは、ムージルがヴァレーリエ体験したのはフェルデンにおいてだと考えているが、現在ではそれは誤りだとされている。ムージルがヴァレーリエと出会ったのはシュタイアマルク州のシュラートミングであり、ヴァレーリエ体験したのはシュラートミング近郊のフィルツモースという村である(Corino: Robert Musil, S. 156, 162. 邦訳『ムージル伝記』第1巻、162, 171頁)。また、ヴァレーリエ体験が起こった年については訳註28を参照。
- \*31 ヴァレーリエとは女優パウラ・ウルマンのことではないかと考えられていたが、のちの研究により、ピアニストのヴァレーリエ・ヒルパートであることが明らかになった(Emanuella Veronika Fanelli: »Als er noch Fraeulein Valerie liebte.« Musils Valerie-Erlebnis. Eine biographisch-kritische Korrektur. In: Musil-Forum. 19/20 (1993/94)を参照)。『特性のない男』第1巻第32章で、少佐夫人はヴァレーリエと同じくピアノの専門教育を受けた人物として描かれている。
- \*32 訳註30を参照。
- \*33 おそらくヘルマ・ディーツはブリュンの布地商店のひとつに勤めていたのであり、ウィルキンズが言うように女中だったのではない(Karl Corino: Robert Musil, S. 192. 邦訳『ムージル伝記』第1巻、206頁)。
- \*34 おそらく「ロマンの結末」に出てくるアントワネットという人物のことを指しているのであろうが、ウィルキンズがどういう意図からアントワネットに言及したかは不明。
- \*35 ウィルキンズが参照しているTBの記述では、ムージルが梅毒にかかったのは1902年のことである(TB, 33)。
- \*36 アガータとともにスパイになって終わるのは草稿「スパイ」におけるエピソードであり、ウィルキンズはこの内容を草稿「双子の妹」内のs<sub>4</sub>+1-16草稿と混同していると思われる。

- \*37 「楽園への旅」草稿に付けられた、「第2巻第4章群」と見出しのついた表紙の成立年代は、クラゲンフルト版によれば1929年1月から同年4月のあいだである。それゆえ1929年1月から始まった清書のさいに「楽園への旅」を第2巻に組み入れようとムージルが考えていたことは推測できるものの、それを「唯一の計画」と限定する根拠については不明。ウィルキンズはカイザーとの共著書のなかで、第2巻第45章「一連の奇妙な体験の始まり」で兄妹が性的なものを拒絶したことは最終的な性格を持っていると述べ、兄妹の関係が性的なものに行きつくことはないと考えていたが、この論文ではそれを否定するような主張が見られる (Ernst Kaiser/Eithne Wilkins: Robert Musil. Eine Einführung in das Werk. Stuttgart 1962, S. 235)。
- \*38 この記述からすると、一見してウィルキンズは「楽園への旅」が『特性のない男』の完成稿に組み入れられる予定だったと考えているようだが、動詞「用いられた (was used)」が過去形になっていることから、死ぬまでにムージルが書いた章のなかで「楽園への旅」が用いられたことになる。しかし9. A-Ag. や  $s_4+1-16$  の内容が描かれている章はないので、おそらく内容として同一ということではなく、「ムージルの〈少佐夫人恋愛事件〉(1)」、341頁のように、テキスト中の表現が用いられているということを言っているのであろう。
- \*39 クラゲンフルト版のコメンタールによれば、初めは完全にポジティブなものとして捉えられていたヴァレーリエ体験に、1905年以降批判的な評価が混じってくる。エレン・ケイやメーテルリンクにたいし、ムージルが批判的な態度をとりはじめた時期である。『特性のない男』で彼らの思想を語るのはディオティーマやアルンハイム、リンドナー、ボナデアであり、ウルリッヒの批判の対象となる。ムージルにとってのヴァレーリエ体験の意味は多様化し、愛の感情や美的感受性という肯定的な意味だけでなく、非理性的なほどに高められた感傷性や、盲目的な善への信仰という否定的な意味をも帯びることになった。こうした否定的視点から捉えられた人物が、ノート22および36で登場する、ヴァレーリエという名の「センチ・メンタルな恋人」であり、ボナデアのプロトタイプとなった。ボナデアの名前がアンナになったことについては不明。
- \*40 アンナとはおそらくムージル家の知人の娘であり、ムージルの両親はムージルとアンナとの結婚を望んでいた。彼ら二人は交際していたが、1907年の4月末か5月に破局を迎えた (Karl Corino: Robert Musil, S. 277ff. 邦訳『ムージル伝記』第1巻、324頁以下)。
- \*41  $s_4$  手稿のカバーとは Mappe VII/9/154 のことであるが、ここには「第33章」ではなく「第38章」とある。
- \*42 『特性のない男』第2巻第3部のタイトルは „Ins Tausendjährige Reich (Die Verbrecher)“ であるが、1930年に出版された『特性のない男』第1巻の巻末に付された第2巻の予告では、第3部のタイトルは „Die Verbrecher“ となっていた。ここで言及されている草稿 Mappe I/3/15 において、第4部のタイトル „Eine Art Ende“ と対応するかたちで „Verbrecher“ という言葉が使われていたことから、まだ第3部のタイトルが „Verbrecher“ であったとき、つまり少なくとも第2巻出版前にこの草稿は書かれたとウィルキンズは考えている。しかしクラゲンフルト版では、Mappe I/3/15 が含まれる草稿群の成立年代から、この草稿は1933年中葉から1934年3月にかけて書かれたとされている。もしその時期に成立したのなら、すでに第2巻が出版され第3部のタイトルも決まっているため、「……への旅」は第3部のサブタイトルであるというウィルキンズの推測は誤っていることになる。Mappe I/3/15 に „Die Verbrecher: (Die Reise ins..)“ と書かれていることからウィルキンズはこのように推測したのであろうが、この草稿が、「楽園への旅」を書き換えて『特性のない男』に組みこむアイデアを記したものであることから考えると、「……への旅」は「楽園への旅」に代わるモチーフの名前であると考えられる。しかしその場合、第2巻が出版され第3部のタイトルがすでに決定している時期に書かれた草稿のなかで、なぜ古いタイトルである „Verbrecher“ がいまだに使われているかにつ

いては不明である。

- \*43 愛と美の女神アプロディーテーはヘーパイストスと結婚しながら軍神アレースと情を通じていた。『オデュッセイア』では、二人の仲を知ったヘーパイストスがベッドに巧みに魔法の網をかけて二人を捕え、神々を呼んでその醜情を見せた。(高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』より)
- \*44 ここでウィルキンズがとりあげているドイツ語原文は以下のとおり。„...die zwischen Erfüllung und Vergeblichkeit liegende Eintönigkeit der Seele in ihm weckte, die dem Land eigentümlich ist und ihn seit jener ersten «Reise-Flucht» in seiner Jugend mehr als einmal zu einer Wiederholung gelockt hatte.“
- \*45 第1巻第122章における「遠近法」とは、物の遠近に応じてその視覚的な大きさを変化させるのと同様に、自分の人生の出来事をそれが起こった時系列に応じて適切に配置することを言っている。「物語の順番の「糸」も同様のことを意味しており、通常の人びとであれば持っているこうした遠近法や糸をウルリッヒは失ってしまったとされる。
- \*46 ウィルキンズはここで「現実主義者」と「食欲的なあり方」を同一視しているが、これは誤り。『特性のない男』第2巻第52章「ある夏の日の息吹」(清書稿)によれば、情熱的なあり方の二種類の類型として「食欲的なあり方」-「動物的なもの」-「西方的・西洋的・ファウスト的生感情」-「アクティヴィスト」および「非食欲的なあり方」-「植物的なもの」-「東方的・アジア的・非ファウスト的生感情」-「ニヒリスト」があり、両者はともに「現実主義者」と対立項をなしている。
- \*47 ここでもウィルキンズは「現実主義者」=「食欲的」と誤解している。訳註46を参照。
- \*48 „s<sub>1</sub>+1-16“の「楽園への旅」におけるアンダースとアガーテの破綻をその先に想定してこう言っているのかもしれない。訳註37を参照。
- \*49 原註2を参照。